

平安朝初期に於ける 木造彫刻の興隆に關して(上)

田 澤 坦

平安朝初期以來彫刻の材料に主として木材が用ゐられるやうになつたことは日本彫刻史の常識である。この木彫隆興の理由に就て私は嘗て大岡實君との合著圖説日本美術史に概略次の諸點を擧げて置いた。即ち

一、造像の盛行が乾漆造や塑造の如き複雑な製作法より寧ろ比較的簡單なる木造を撰んだこと。

一、檜の如き彫刻に適した好材料の豊富なること。

一、當時入唐僧等によつて大陸より請來された所謂檀像に刺戟せられたこと。

一、木心乾漆造の製作技術上の發達が自ら木造彫刻に發展したと。

一、木彫によつてのみ味ひ得る鑿痕の面白味例へば所謂鎌波式と稱ばれる刀法に興味を惹かれたこと。

一、寫實を超越して形式的の美しさ特に衣の褶襞等に見るが如きを表はすに適し

平安朝初期に於ける木造彫刻の興隆に關して

た特色を持つこと。

等の諸點を擧げ特に最後の二つの點が相聯關して木彫流行を來した根本的理由と考ふるべきではなからうかと推考したのであつた。

以上の原因に關する説明は簡略を旨とする教科書的の著作であるので省略に従つたので些か補足的な註解を加へ論旨を明らかにして見たいと思ふ。

(註) 平安朝初期に於ける木造彫刻の興隆に關して注目すべき説として、丸尾彰三郎氏の「日本彫刻史上に於ける木彫の誕生」(國華三八八號所載)の一文がある。氏は主として奈良後期の代表的の寺院たる西大寺の資財流記帳(天平神護元年より寶龜十一年に至る)と平安初期の廣隆寺資財校替實錄帳(寛平二年)との記載の佛像の材料を比較して西大寺には銅と鑿(乾漆)と埴(塑)のみで木像のなき事實、廣隆寺にあつては木像のみである事實から九世紀の日本彫刻は材料上から木材を主としたのであり、鑿像時代より木像時代に變化してゐる事實を兩資材帳を根據として證せられてゐる。且つ造像材料の交代が技巧的方面から木心漆布皮法より自然的に木彫の法が修練習得せられ木彫法が成立したことを、又檀像が純粹木彫法の成立に進展する勢を助成せることを、更に日本の木彫が第八九世紀の交、技術上鑿造法か

ら誕生したことを論ぜられた。

余も丸尾氏の説に負ふところ尠くなく、殊更に異をたてるのではないが、更に木彫として獨自の特色が如何にして成立し、如何に完成されて行つたか、その發展過程を探ねて見たいと思ふものである。

一

造像の盛行が乾漆造、塑造の如き複雑なる製作法より寧ろ比較的簡單なる木造を撰んだこと、及び日本に彫刻に適した檜の如き好材料の豊富なること。

この二つは相關聯して最も常識的に推察せられる木彫隆興の一因であらう。即ち奈良朝以來佛教の普遍の趨勢は平安朝に入り益々著しく又密教の隆昌は自ら彫像に繪像に佛像造顯の必要を増加したことも否み難い事實である。且つ従前と異り都市を離れて山岳の幽寂な境地に佛寺を經營せんとする傾向は密教の擡頭と共にその趨勢を昂め來つた。斯の如くして佛寺と共に佛像製作の需要の増加は奈良朝に於けるが如き夾紵（所謂乾漆）や塑土の如き複雑な製作法を必要とする材料よりは寧ろ製作のより簡便なる木材が擇ばれるやうになることも亦自然の推移と首肯できる。殊に山岳寺院にあつては専門彫刻家たる佛師の招聘或は夾紵や塑或は青銅の如き材料、又はこれらの材料の運搬、製作設備等の不便からこれらを材料とする佛像製作に制限が加へられることも當然といはねばならぬ。こゝに最も得易い材料として木材が着目せられ、利用せられるやうになること

二

も何等不思議はない。殊に極めて木材の豊富なる本邦にあつては一層これが利用の盛行を來たす結果を醸し出されるやうになることもまた當然であらう。

遺作に即して視るに平安初期の作品中平城平安の新舊兩帝都或はその附近に傳はる木像にあつては奈良朝の作風を木像にも遺してゐるのである。即ちこの地域の木像には塑造や夾紵造の作風の名残りを新舊何れの寺院の像にあつても觀せられる。京都附近にあつて聖德太子以來の舊寺たる廣隆寺の像例へば講堂の本尊阿彌陀の坐像の如き或は新京に代表的寺院として建立せられ更に空海が賜つて眞言密教の根本道場となりし東寺即ち教王護國寺に於ける講堂諸尊や特種な形相になれる毘跋毘沙門天像の如きも何れも木像でありながらも奈良朝の作風主として夾紵のを示してゐることは否み得ない。

又都市を遠く離れた山間僻地に營まれた寺院の彫像、例へば高野山の金堂の本尊たりし七佛この七體の像は天長初年の造立と推定され、てゐたが、惜くも昭和元年に焼亡した。の如きはその製作技巧に於て恐らく専門の佛師ならざる手に成つたかとも見られ得るやうな素樸な作風を示してゐる。然かもこの像は所謂密教的木像中最も傑出した作例の一として今に喧傳せられてゐるが、この種の作品は彫刻としての價值の高下は別として特に木造彫刻發達の初頭に當る平安朝初期に於て概して文化の中心地を離れた地域に散在して所謂地方的作風の呼稱の下に一類に包括し得る。これまた木造彫刻發達史上第一段階を占むると共に前述の如く彫像の材料に木材を使用せざるを得ない状態を推察せしめるに足るものといへ

るであらう。唯こゝで注意すべきは同じ木材を材料に採りながら次期以後最も普く用ゐられ、且つ彫刻するに最も適當せる性質を具備せる檜材の外に櫟、樺、櫻、桂等の後世類例の多くない種類の木材も利用せられてゐる場合の尠くない事實である。^(註)これは如何に解釋すべきか。或は當時製作法が一木彫成によれる爲めに出來得る限り巨材を索める結果か又木造彫刻の經驗に日淺く特に彫刻に適するや否やを擇ぶことに無頓着たりしところより云はば手當り次第に手近に好適の量を得られる木材を用ゐた場合もあり得たであらう。常識的に種々な解釋もたてられるであらうが、結果よりすれば、日本木造彫刻史上この時期は彫刻に適する木材の撰擇期たるの感を呈してゐる。

(註) 嘗つて奈良美術院を主宰し、國寶の佛像彫刻の修理に一生を捧げられ、その道での最も經驗の深かつた故明珍恒男氏はその著「佛像彫刻」に於て佛像彫刻の材料に關して次の如く述べてゐる。「佛像の數から見ると木造のものが一番多い。そして木造の種類も使へるものなら大概用ひて居るが、時代によりて相違もある。推古時代は重に楠であるが平安朝以後は檜材が九分まである。これは檜が狂ひの少ないこと、彫り易いこと、腐蝕に堪える力の強いこと、良材を得易いことなどからであらう其他、櫟・樺・桂・杉・松等いろいろある。」

二

當時入唐僧等によつて大陸より請來されたる所謂檀像に刺戟せられたこと。

奈良時代に於てあれ程隆昌を極めた夾紵像や塑像が殆んどその影をひそめ、又逆に殊に根本史料としての文獻の上に殆んど片鱗を見

平安朝初期に於ける木造彫刻の興隆に關して

せぬ木像がこの平安朝の時代になつて銅、夾紵、塑に替つて隆昌を極めるに至つた事實は、前述の如き佛像の需要の増加と材料の豊富等にその一因の存することは否まれない。然し單にかゝる外的な又云はゞ偶然的な理由のみでなく何等か木材といふ材料そのものに對する新しい觀念を植ゑつける事情が存し、特に日本の彫刻と云はゞ信仰の對象としての所謂佛像といひ得るのであるから材料それ自身を尊しとする考へ方がこれに作用すれば一層この材料の彫像が隆盛に趣く結果を來たすことは正に當然なことである。かゝる木像尊重の觀念を興起し日本の彫刻史上に新しい方向を與へる役目を果たしたのがこゝに所謂檀像であると思ふ。

檀像に關しては余は嘗て雜誌國華四六八號に「我邦檀像と醍醐寺聖觀音像に就て」と題して檀像に就ての梗概に觸れたことであり、又美術研究五十號に渡邊一君が智滿寺藏刻出小佛龕像に關聯して檀龕檀木を以て刻出せる佛龕をいふを中心として檀像に就てその敘述が及ばされてゐる。就ては國華誌上に於て單に文獻を上ぐるに止まつた檀像に對する尊崇の事實を主とし檀像が如何に本邦に於て理解せられたかを一應省みて置きたいと思ふ。

檀像とは云ふまでもなく梅檀を材とした彫像を指すのではあるが、これが尊崇を受ける主な理由は、梅檀が佛教の興起せる天竺を主產地としその地に於ても香料の原料として又治病に特效ある瑞木として理解せられてゐることにもよるが、佛像造立の初例とされる優填王思慕によつて造られた如來像の材が牛頭梅檀であつたといふ故事

増一阿含經第二十八其他

に據る點が最も著しい。更に崇佛の天子として著聞せる梁の武帝は天監元年正月に檀像が國內に入るを夢みたるによつて詔を發して人を募り將軍郝騫、謝文筆等八十人を天竺に遣し、舍衛國王に優填王所造の祇桓精舍の栴檀佛像を求め請はしめたところ、國王は紫檀を以て摸刻せしめて附與したので郝騫等はこの第二像を獲て還り、帝は特に百僚と共に迎へて太極殿に安置したといふ傳説がある。三寶感通錄卷第二、梁荊州優填王栴檀像緣第二十八、その他法苑珠林等こゝに檀像尊崇は優填王思慕の事實と相關聯して摸刻の像を得て益々顯著となつたと思料せられる。

因に檀像に關してはこれより前劉宋の泰始年中東海の何敬叔が栴檀を以て像を造る由が三寶感通錄、法苑珠林等に見えるのが震旦に於ける檀像の造立に關する最古の記録とせられてをり、又請來の像としては、齊の永明二年扶南國王閼那跋摩が天竺釋那伽仙を遣はして金鏤龍王と共に白檀像一軀を獻した記録が最も古いとされてゐる。南齊書二十八東夷列傳

下つて唐貞觀十九年玄奘三藏が天竺に佛蹟を遍歴して長安に歸りたる際請來せる佛像八軀、その内四軀（又は三軀）は檀像であつた。即ち大唐西域記によれば八軀の内

擬婆羅痾斯國鹿野苑初轉法輪像、刻檀佛像、一軀、通高座高尺有五寸

擬憍賞彌國出愛王思慕如來刻檀寫真像、刻檀佛像一軀通光座高四尺

擬那揭羅竭國伏毒龍所留影像刻檀佛像一軀通光座高尺有三寸

擬吠舍釐國迎城行化刻檀像（京都帝國大學文科大學叢書）
本ニ「刻檀」ノ二字ナシ

の右四軀が刻檀像とある。これ等の像は詔によつて建立せられた大慈恩寺に移し安置せられたが其際に於ける上下舉つての尊崇の情況

は如何に熱狂的なものであつたかは慈恩大師の傳等に詳細に傳へられてゐる。又これによつて如何に印度傳來の像が珍重せられたかを知らると同時に檀像が之に伴つて特殊な尊崇を受けたことも亦當然であつたと思はれる。

又檀像が彼地にあつて如何に貴重せられてゐたかは唐大和上東征傳に鑒真和上が廣州に至りし時の記事に

開元寺有胡人造白檀華嚴經九會。率工匠六十人。三十年造畢。用物卅萬貫錢。欲傳於天竺。採訪使劉臣鄰奏狀。勅留開元寺供養。七寶莊嚴不可思議。

とあるを見ても知られると同時に此記事と高野山、嚴嶋神社等の弘法大師請來と傳へる枕本尊と通稱せられる龕像とを考へ併せれば又白檀像が緻密なる彫刻に適したるかを、更に又檀像と外國殊に印度との關係を推測せしめるに足りやう。圖版第一
○圖參照

次に本邦に於て行はれたる檀像の記事を求むるに天平十九年「法隆寺伽藍緣起并流記資財帳」に

檀像壹具

右養老三年歲次己未從唐請坐者

とあるを最古として、唐大和上東征傳の請來品目中に

彫白栴檀千手像一軀

空海の請來錄に

刻白檀佛菩薩金剛寺像一龕（註1）

圓仁の「入唐新求聖教目錄」に

檀龕涅槃淨土一合

檀龕西方淨土一合

檀龕僧伽誌公邁廻三聖像一合

圓珍の「智證大師公驗目錄」(園城寺文書)に

加納

檀龕佛一箱一箱一大小

已上納小厨子一基題云大師御公驗

猶唐傳來か日本の製作か不明であるが、奈良時代神護景雲元年八

月卅日大法師平榮の記録せる「阿彌陀院寶物」群書類 帳にも檀像の

ことがある。即ちその目錄の部に

檀像觀音菩薩像十軀

を挙げ本文中に

檀像觀音菩薩像一軀金蓮華坐基紫檀臺上在礎

の一軀を挙げてゐる。

觀世音寺資財帳の嘉保年間寶藏實錄日記の別納の條に

白檀八角淨土一張高九寸六分 下徑四寸 大唐佛像

右檢去天慶四年六月十四日云 釋迦牟尼佛右上御手落失。又儼菩薩一體落

失也。藥師佛蓋頂缺。外陳飛天四體缺。又外地音聲軀菩薩缺。外地戸打立薩

輪也。寛治六年帳云。今檢同前

とある等を列舉することが出来る。

次に本邦に於ける檀像造立に關する記事としては、延暦廿二年最

澄が渡海平安祈願の爲め太宰府竈門寺に白檀像の藥師佛四軀を造立

せることが叡岳要記等の引用文に見える。

鎮西竈門山

本傳云。延暦廿二年十月廿三日。於太宰府竈門寺爲四船平達敬造白檀像藥師

平安朝初期に於ける木造彫刻の興隆に關して

佛四體。高六尺餘。其名號無勝淨土善名。講吉祥王如來云々(下略)

又空海の性靈集卷六に

東太上爲故中務卿親王造刻檀像願文

(上略) 爲故中務卿親王及夫人故藤原氏。敬造刻檀釋迦牟尼佛像一軀。觀世

音菩薩像一軀。虛空藏菩薩像一軀。並金銀泥畫四大忿怒王像四軀。四攝八供

養。八大大王像等

とある。此他に本朝文粹卷十三並に十四の願文の條に收められた貞

元元年九月十九日左大臣源兼明の「供養自筆法華經願文」天曆七年

八月七日中納言藤原師尹の「朱雀院周忌御願文」等一時代後れた平

安中期以降の文獻に於ては屢々觸目されるのである。然し支那に於

ても檀像を尊重するの餘り敬稱の意にて檀像ならざる木像に檀像の

名稱を附した場合も尠くなかつたことが推察せられるのであるが、

日本にあつてもまた檀像に就てこれと同様な傾向が窺はれ平安初期

即ち大略西暦の九世紀の後期頃より顯著になつたやうに思はれる。

例へば鎌倉時代の編纂に依る「神護寺略記」金堂本尊藥師像に就

て

檀像藥師佛像一軀長五尺五寸

(中略)

各弘仁資財帳云。藥師佛像一軀、(中略)承平實錄帳云、檀像一軀長五尺五寸

との記載がある。この像は現在の金堂本尊を指すものと解せられる

が、弘仁の資財帳にない「檀像」の二字が承平の實錄帳に至つて加

へられてゐることは「檀像」の解釋の變遷を物語る一例と見られる

であらう。

又寛平二年の「廣隆寺資財校替帳」の金堂の條に

靈驗藥師佛檀像一軀居高三尺

不空羂索菩薩檀像一軀立高一丈七寸

十一面千手觀世音菩薩檀像一軀立高八尺

藥師佛檀像一軀居高二尺

觀世音菩薩檀像一軀立高五尺

觀世音菩薩檀像一軀立高四尺二寸

十一面觀世音菩薩檀像一軀立高五尺五寸

右七軀の檀像を擧げてをり、これ等のうち不空羂索菩薩及び十一面千手觀音の兩像は現今講堂の北側の東西兩隅に安置せられる像に該當すると考へられるが、この兩像は今日吾人が考へる檀像とは餘程その趣を異にするもので殊に不空羂索像の如きは乾漆像に見られた程に厚手に塗料が施されてをり、檀像としての特色は窺ひ得ないものである。これ等もまた寛平二年頃にあつては檀像と解されてゐたことを示すものであらう。

又現在實物に徴し得ないが檀像と注記される像が比叡山の記録を編纂せる山門堂舎記、叡岳要記、九院佛閣抄等にも散見する。山門堂舎記によれば、

根本中堂（一乘止觀院）の條

普賢菩薩像一軀

毗沙門天王像一軀 已上並壇像高三尺各坐椅子（この二像に就ては叡岳要記、九院佛閣抄には載録せず）

梵天帝尺四天王像 立高五尺壇像忠仁公所造也

以上が擧げられてをり、又東大寺要錄卷四南阿彌陀堂の條に

白檀觀音像一枚

見永觀二年分付帳

との記載がある。叡山の像に關しては果して如何なる像であるかは明にし得ないが、東大寺の觀音像は員數が一枚とありかの常陸の小松寺如意輪觀音像の如き所謂檀像の浮彫かと推察せられる。但し請來像であるか日本での製作であるか、又製作年代も永觀二年以前である以外に手懸りはない。

これ等によつて見れば總じて日本に於て檀像の意味が明確に理解せられてゐない場合も存し、殊に時代の降るに従つて支那と同様に木造の尊稱の意味で檀像の名稱が附加せられる場合も尠くなかつたと解せられるのである。

以上によつて檀像が大陸とこれが大陸より傳來後間もない平安朝の初頭に當つて檀像が如何なるものとして解せられてゐたかの概略を考察したのであるが如何にして檀像が平安朝になつて特に重視せられるやうになつたかに就ては經典等によつて識り得た概念的な又歴史的な檀像に對する崇拜が空海圓仁等の入唐諸家の請來せる檀像を得ることによつて一層深められたことが先づ考へられる。然し更に檀像が彫刻史上に持つ意義を考及すれば、この時代の佛像製作材料に於て奈良時代に盛行せる夾紵が後述する如く夫自身として木像に發展して行く傾向が存し、木像に對する關心が強まつて來た時に際し天平時代に殆んど省みられなかつた檀像の存在が大きく表面に浮び上つて來る結果となつたのは當然であつたといへやう。斯くし

釋迦如來及諸尊像龕

和歌山 金剛峯寺藏

て檀像が木像を發達せしめる上に尠からざる寄與をなしたことも自ら首肯せられるであらう。(註2)

(註1) 空海の請來錄には次の如く記載されてゐる。即ち「道具」として五寶五鉈金

剛杵以下を列記したる次に

阿闍梨付囑物

佛舍利八十粒就中金色舍利一粒

刻白檀佛菩薩金剛等像一龕

白縹大曼荼羅尊四百卅七尊

白縹金剛界三昧耶曼荼羅尊一百二十尊

五寶三昧耶金剛一口

金銅鉢子一具二口

冢床子一口

白螺貝一口

右八種物等。本是金剛智阿闍梨從南天竺國持來。轉付大廣智阿闍梨。廣智三藏
又轉與青龍阿闍梨。青龍和尚又轉賜空海斯乃傳法之印信。草生之歸依者也。

とある。本文に引用せる白檀龜の次に頭に白縹の二字を附した曼荼羅二點を擧げてゐるがこの白縹云々に就てはその意を明かにし得ないが縹は繫の義なるによつて或は板彫の屏風様になせる形成なるかも知れず、又白を白檀の略と解し得ればこれまた檀像の一種であらう。今久らく疑を存して附記するに止める。

猶最澄の請來品に關しては請來目錄又は八家祕錄に佛像の記載なきも日本後紀延
暦二十四年八月九日條に

是日請入唐求法僧最澄於殿上。悔過讀經最澄獻唐國佛像
と見える檀像なるや否や不明なるも併せて附記して置く。

(註2) 本節に於ては主として檀像が如何なる意味かに於て本邦木像彫刻の發達に寄與したかに述べたので、檀像そのものに關し、又本邦に於いて行はれた檀像の模像に就ての考察等には敢てこれに觸れず主として文獻の上より檀像に關する解釋の迹を辿るに止めた。檀像獨特の技巧的方面に就ては木造彫刻の技巧に關する敘述に關聯して言及する意圖である。

平安朝初期に於ける木造彫刻の興隆に關して

又大陸の文獻に關しては大村西崖氏の支那美術史雕塑篇に俟つところ尠くない。
記して以て深謝の微意を捧げたいと思ふ。